震災を経験された方の体験談

Interview

01

果樹園経営

安齋 忠幸さん

02

エアレース・パイロット/
エアロバティック・
パイロット

室屋 義秀さん

03

飯坂温泉松島屋旅館
女将

高橋 美奈子さん

04

大波地区自治振興協議会
前会長

佐藤 俊道さん

05

土湯温泉山水荘
若旦那

渡邉 利生さん

06

特定非営利活動法人
ビーンズふくしま
理事長

若月 ちよさん

07

飯野・明治仮設住宅
飯舘自治会　前会長

佐藤 雅春さん

08

主婦

関向 あつ子さん

09

ふくしま子ども支援
センター　職員

三浦 恵美里さん

10

福島市自治振興協議会連合会
顧問
渡利地区自治振興協議会
会長
花見山観光振興協議会　会長
渡利春日町会　会長

菅野 廣男さん

11

未来農業株式会社
代表取締役
農業組合法人 福島未来
農業生産組合代表理事

丹野 友幸さん

12

福島信用金庫　職員

宗像 夕菜さん

13

福島大学3年生
人文社会学群人間発達
文化学類 文化探究専攻
在籍

髙橋 春奈さん

14

福島市立福島第三小学校
4年生

橋本 栞さん

15

国語教師・詩人
「ふたば未来学園」教育
復興応援団
福島県教育復興大使
NHK復興サポーター
福島大学応援大使

和合 亮一さん

16

共同作業所 ぽけっと
代表
特定非営利活動法人
えいど福島　理事長

吉田 好子さん

01 若手農家と果樹を除染 ともに乗り越えて生まれた絆

果樹園経営　安齋 忠幸さん

震災当日について

私は音楽活動をしており、震災当日はライブの予定でした。3時半からのリハーサルのために、自宅から出発しようと準備をしていた時に地震が起こりました。とっさに外へ出ると、近所の人たちも外へ出てきており、皆「どうしよう」と不安になっていました。マンホールがドンっと地面から飛び出していて、信号も全部止まっていました。「これは異常だな。普通の地震じゃないな」と思い、親などに連絡を取り、家族が無事であることをまず確認しました。

風評被害で苦労したこと

震災後は放射能の影響で、お客様が福島の果物を敬遠されることもあり、普段では行かないような場所に出向き、なんとか商品を売るように頑張りました。しかし「福島の農産物は要らない」と言われるお客さんもいて、なかなか売るのには苦労しました。

風評被害への対策・活動

やはり震災直後の1～2年ぐらいは非常に風評に関する被害を感じました。特に市場に出荷する農産物は値段が安く取引されました。しかし、直接販売に関しては、「ふくしまの桃はおいしくて、放射能の検査もしっかりしているので買うよ」と言っていただけるお客さんだけが来てくれたので、その点では風評被害は感じませんでした。

果樹園の除染活動について

震災後に、果樹の木を高圧洗浄機で全部除染することになりました。年配の農家の方が多いので、「自分たちでは除染は出来ない」と言う方もたくさんいました。そこで地元の農家の若手14名で組織していた「飯坂アグリ倶楽部」で手分けし、地域の皆様と協力しながら除染活動を行いました。

支援してくれた方への感謝の気持ち

うちは贈答品用の果物を中心に取り扱っており、お客様個人から注文を受けて、配送しています。そのため人とのつながりが非常に大切で、毎年注文していただいている多くのお客様から「大丈夫かい」など心配の電話を頂きました。また、「果物を購入してくれそうな仲間に声をかけてみるよ」と言ってくださった方は100件程の注文を1人で取って来ていただきました。

いろいろな方に支えられ、応援をいただき、何とか乗り越えられたと思っています。支援してくださった方々へ、これからも毎年おいしい果物を届けられるように頑張っていきたいと思います。（取材日:2020/07/07）

02 パイロットとしてできる支援を そして世界に今のふくしまを届ける

エアレース・パイロット/
エアロバティック・パイロット　室屋 義秀さん

震災当日について

3月11日は、ふくしまスカイパークにはまだ雪が積もっていました。その日の夜だったと思いますが、福島市役所から、支援のヘリコプターの離着陸のため、飛行場を使用したいとの要請がありました。滑走路全体の被害状況が見えていない状況でしたが、ヘリコプターの離発着等々が出来るよう、重機を借りてきて飛行場の除雪を行うことから始めました。

支援活動について

震災後のふくしまスカイパークは、滑走路全体にひびや一部陥没などがありましたが、ヘリコプターの離発着はできる状況でした。

当時、物資輸送などの関係で、福島空港はかなりのヘリコプターを受け入れており満杯になっていて、仙台空港は津波により水没して使えないという状況でした。ふくしまスカイパークが、釜石や岩手のほうに支援物資を運ぶヘリコプターの給油の中継、物資集積の基地になることから、その受け入れ体制を作るためヘリコプターが常に飛べるという状況を作ることから始めました。

2～3週間が経ち緊急の物資輸送が落ち着いてきたときに、我々に何が出来るかと考え、近くの避難所にはかなり多くの方が避難してきているという事で、ゴールデンウィークに簡単なイベントとエアショーを開催しました。エアショーを見て、ほんの少しでも気分を紛らわしてもらえれば、と言う気持ちでした。

世界から見た「ふくしま」

震災直後の2011年8月にイタリアの世界選手権へ参戦しました。やはり「ふくしま」という名前は有名になっており、原子力の被害を受けたということで、福島県全域が基本的に人が住めないようなイメージを海外の人達は持っていたと思います。我々が福島から参戦することで、福島はどういう所なのか、今の状況はどうなのかなどの話をすることが出来ました。

原子力災害が、とても甚大な災害であったのは事実であり、今も現在進行形で続いていると思いますが、「ふくしま」でも全域ではないという事や、福島市内の実際の放射線量値などを丁寧に説明していくことで、具体的な被害状況については理解をしてもらえたと思っています。

子どもたちに伝えたいこと

人はそれぞれ心の中に必ずエネルギーを持っています。しかし、その使い方を知らない人が多いのではないかと思います。だから、自分を見つめ直し、自分が持っている力に気づくことで、自分自身にエールを送ることが出来るのではないかと思います。アスリートとしての経験を伝えることで、そのエネルギーを引き出す手助けになれば良いと思っています。（取材日:2020/07/07）

03 旅館としてのおもてなしを 避難者受け入れのため不眠不休の毎日

飯坂温泉松島屋旅館　女将　高橋 美奈子さん

震災当日について

飯坂温泉の旅館組合で、3月20日に外務省や大使館に飯坂温泉のプレゼンするための資料をまとめていました。いきなりひどい揺れが来て、パソコンなどの電源が全て落ちてしまいました。旅館組合は飯坂温泉観光協会の中にあり、ちょうど観光案内に訪れていたお客様がとんでもない悲鳴をあげられていたのが、とても印象に残っています。

温泉が震災を予知？

旅館の温泉ですが、震災の数日前から湯温がすごく上がりました。飯坂温泉は元々熱い温泉というイメージがあると思いますが、熱いお湯に慣れている常連のお客様が「お湯が熱くてとても入れない」と言いまして、水を足しても熱くて入れませんでした。その時、当時40年くらい旅館の湯守をして下さった方が、「これは大地震が来るかもしれないよ。前の宮城県沖地震の時も、同じことが起きたよ」と言いました。そして、3月11日に大きな揺れが来た時に湯守の方の言葉を思い出し「本当に地震が来た」「まさかと思ったけど、本当の事だった」と思いました。

避難所開設前に避難者の受け入れ

避難所が開設される前にも浜通りから、多くの避難者が飯坂温泉に来ていました。そこで県や市と協議し、同じ県民として無償で避難者を受け入れることを決め、3月11日の夕方から何組か避難者を受け入れました。実際、国や県から二次避難所の協力要請が来たのは4月中旬でしたので、それまではボランティアで受け入れていました。

避難者を受け入れていく中での苦労

実際、避難者を受け入れるということは非常に厳しい状況でした。特に、お身内を亡くされた方々への対応です。その方々と普通に避難なさってきた方々が、同じ館内でどのように過ごしていただけるかを考えました。3カ月、4カ月と長い期間、集団生活になると避難者もストレスで不満がたまってきます。体を壊さず過ごしていただければと、その調整が一番苦労した部分です。そのような中で、避難してきている子どもたちには、ずいぶん助けてもらいました。子どもたちが作った工作や料理などを見てもらったり、提供したりすると、お身内を亡くされ落ち込んでいる避難者も笑ってくれたり、食が進まなかった方々も食べ物を口にしたりしてくれました。

震災を経験して、伝えたいこと

「福島は終わった」と色々な人たち、特に同業者、他の地域の旅館の方に言われました。「別な地域で旅館を続ければ」など声をかけられたこともありました。しかし、福島から離れませんでした。今は、離れなくて良かったなと思います。今や世界の福島です。福島は世界中に知られた地域です。福島に生まれたこと、生きていけること、それを教示として保ちながら今後も過ごして行きたい、そう思っています。（取材日:2020/07/07）

04 自治会長としていち早く除染して地区を守る 多くのボランティアへ感謝

大波地区自治振興協議会　前会長　佐藤 俊道さん

震災当日について

自宅で来客対応をしていました。大きな揺れで揺れの時間も長かったので、お客様と「大きいね。早く終われ、早く終われ。なかなか終わらないな」と話していました。その後、自治振興協議会の会長として、各地区の役員に一人暮らし世帯や老人世帯のお宅を訪ねて安否確認をするように伝えました。また、何か困ったことがあったら対応できるように5～6時間集会所に待機してもらいました。

自治振興協議会の会長として行動したこと

原発事故での放射能について、これが人間の体や地域にどんな悪影響を及ぼすのか全く分かりませんでした。放射能が本来どういうものかという事を分からずにデマや噂に振り回されていたように思います。

地域を守るためにはまず、除染が必要だという事が分かり、除染のための予算の確保や速やかな実施について陳情文を作成し、国や県へ7～8人でお願いに行きました。大波は比較的線量が高い、危ない、このままでは駄目だというような意見もあり、除染を早い段階で行政側に実施していただきました。大波地区は市内で一番最初に除染を実施した地域であり、当時の総理大臣も現地視察に来ました。

除染作業について

大波地区は地域の住民の理解もあり仮置場を決めることが出来たので、除染作業を早く進めることが出来ました。放射能は時間が経つほど、土の中や建物の壁、屋根、舗装やコンクリートに染み込み除染しにくくなるので、すぐに除染を行うことが大切であり、一番効果があるといわれていました。そういう意味で、除染をすぐに行うことが出来たことが放射能の数値が下がった結果につながったのだと思います。

ボランティアについて

除染を進めるにあたり、除染作業をする前に住宅周りの物を撤去したり、草刈りなどの片付けを手伝ってもらえるようなボランティアをお願いできないか社会福祉協議会へ相談しました。そこで、紹介されたボランティア団体の呼びかけもあり、全国から何度もボランティアとして来ていただきました。大波まで来る費用は全て自己負担になるのにもかかわらず九州や北海道、一番遠いところからはハワイからも来ていただきました。縁もゆかりもない大波のために見ず知らずの方が、除染ボランティアのために来てくださり、私達を初め地域の人達も、ここまでしてくれることに感謝の気持ちでいっぱいです。

（取材日:2020/07/08）

05 間違った情報での風評被害の恐ろしさ 若旦那企画で活気を取り戻す

土湯温泉山水荘　若旦那　渡邉 利生さん

震災当日について

当時私は東京の大学生で、ちょうど卒業式を迎える1週間前くらいでした。関東も結構大きく揺れたので、最初は関東大地震が起きたのかと思っていたのですが、テレビのニュースを見たらふるさとの福島県が被災しているということで、非常にびっくりしました。不安な思いで、親に電話を掛けたのですが当然通じず、近くの公衆電話にかけこんで、まずは親の安否確認を行いました。

震災発生後に

新潟での1年半の修行後、福島に戻って家業を継ぎました。その中で、予約を希望されるお客様から「福島に行きたいと思っていますが、水って飲めますか」というような問い合わせを受けた時には、非常にショックを受けました。私たちは普通に生活をしているのに、なぜこのようなことを言われなければならないのかと。ニュースだけの情報だと間違いや偏った一つの事実だけが福島のイメージになってしまうと実感し、それが風評の恐ろしさだと思いました。

風評払拭の活動をすればするほど、風評被害の壁に当たると言う現実に直面しました。これまでも旅館や土湯温泉のPRは行ってきましたが、福島学院大学の木村准教授（当時）に協力を仰ぎプロジェクトを立ち上げました。若い目線で福島の色々な風評払拭の取り組みを進めて行こうということで活動を始めました。

風評払拭のために具体的に取り組んだこと

プロジェクトの1つとして「被災地で一生懸命頑張っている若者の姿を描くのが風評払拭になるのでは」ということで、県北の4温泉地でもある飯坂温泉、高湯温泉、土湯温泉、岳温泉の若旦那とも連携し「若旦那図鑑」という本を発行することになりました。最初は、私達も乗り気ではありませんでしたが、色々なところで話題になり、新聞やテレビ等のメディアにも取り上げてもらいました。また、食の魅力発信の側面から「福島にはおいしいお酒や食べ物があります」と言うのを若旦那のキャラクターで情報を発信しました。半信半疑でプロジェクトを進めていましたが、多くの人から応援や声援をいただき、県北の温泉地のPRが出来たと思います。

次世代の方へメッセージ

誰かのせいにしたり、他人に任せるのではなく、若者が自分たちの住みよい地域を若者の視点で作っていくという気風が大事だと思います。私達もそうでしたが、一歩を踏み出す勇気を持ってチャレンジしていくことが、福島の復興につながっていくと思います。

（取材日:2020/07/08）

06 仮設での避難生活
子どもたちに安心のベースをつくる支援活動

特定非営利活動法人ビーンズふくしま
理事長　若月 ちよさん

震災当日について

矢吹町の農業短大に通っている息子が春休みで帰省するということで、迎えに行っていました。今でも、足の裏から地震の来る感じは感覚的に残っています。福島市への道中、まちでは、道路の両脇の家は瓦が崩れ、戸が外れ、停電で真っ暗のところもありました。市内に入り、ラジオの情報で国道4号の伏拝は土手が崩れて通れないことが分かったので、飯野町の方を経由して自宅に戻ってきました。

震災後、始まった支援活動

ビーンズふくしまは20年前からフリースクールという形で、子どもたちへの支援を行っておりました。震災後の2011年9月に、「うつくしま子ども未来応援プロジェクト」を立ち上げ、避難してきた子どもたちが多い仮設住宅へ支援を始めました。

避難所を転々とし、ようやく仮設住宅に入れても今までの生活とは全く違う状況でしたので、子どもたちは落ち着かない様子で、親たちもどうすれば良いのかわからない状況でした。そのような中だったので、子どもたちの育ちを支える、子どもたちを中心としたコミュニティー作りを優先しました。子どもたちと一緒に遊んだりイベントを開催したりするところから始め、徐々に学習支援へと広げいきました。

障がいのある避難者への支援

相双地域から仮設住宅に入られた発達障害をお持ちのお子さんがいました。地元だとある程度慣れた環境で落ち着いた生活をしていたようですが、急激な変化に弱いお子さんだったので、震災による避難生活や仮設住宅での生活に慣れず、「どうして良いか分からない」と暴れてしまったという事がありました。親御さんも、どう接してよいかわからなくなったようです。そこで、丁寧に話を聞き、一緒に考え、様々な関係機関と連携しながら支援したこともありました。

子どもたちを支える地域とは

子どもたちの気持ちを小さい時から、周りの大人がしっかりと受け止めて、その気持ちに対して答えていくことが大切だと思います。「ちゃんと出来ているから大丈夫だよ。安心して良いよ」と、子どもたちの心の中に安心できる状況を作り出す必要があります。そのために、子どもたちの育ちを支えられる地域、支える大人たちになれたらよいと思います。これが、これからの福島を支えて行く、子どもたち一人ひとりが自分らしく育っていくことにつながると思います。（取材日:2020/07/08）

07 飯舘村から福島市の仮設住宅へ 福島市のお世話になった方々へ恩返しを

飯野・明治仮設住宅飯舘自治会　前会長　佐藤 雅春さん

震災当日について

農機具の展示会から帰って、家で休んでいたところにすごい揺れを感じました。自分の家は大きな被害はありませんでしたが、周りの家は屋根瓦が落ちているところもあり、大変な地震だと感じました。テレビもつかない状態で、大きな地震だとは分かりましたが、原発事故の恐ろしさは分からなかったので、その時は避難しませんでした。南相馬から避難してくる人が家の前の道路をずっと通っていたので、深夜でも家の前が明るかったのを覚えています。

避難の状況について

同居していた母は足が不自由だったので、すぐに避難は出来ませんでした。その後、役場から避難の指導がありましたが、指定された避難場所が猪苗代町や磐梯町と遠方でしたので、「そんなに遠くまでは避難できない」と考え避難せず自宅にいました。そうした中、福島市飯野町に役場の機能が移り明治地区という所に仮設住宅が出来たという事で、震災後の6月に入居を希望し避難しました。この仮設住宅は飯舘村の村民だけの仮設住宅でした。

仮設住宅での生活

仮設住宅には高齢者から子どもまで、色々な人たちが避難していました。若い方は仮設住宅から仕事場や学校へ向ったり、飯舘村の自宅へ行き家の管理をしたりしていましたが、高齢者のほとんどは仮設住宅に残っていました。高齢者だけだと、どうしても部屋に閉じこもりがちになってしまうので、夕方にみんなで集まるようにしました。飯舘村の村民だけなので、話が弾みいい気分転換になっていたと思います。

仮設住宅には集会所がありました。そこでは、健康体操や映画の放映など様々な催し物が開催されました。また、福島市飯野町の婦人会の方との交流で、花を生けたり「つるし雛」の作り方などを教えてもらったりしている人もいました。各方面からたくさんの支援をいただき、福島大学の学生の方と芋煮会や花火をしたり、北海道から30名ほどが大正琴を演奏しに来てもらったりしたのを覚えています。

仮設住宅で自治会長として

私は仮設住宅に7年間避難しており、3期目の自治会長になりました。住民もある程度避難生活に慣れていましたから、大きな揉め事はありませんでした。一番の仕事は仮設住宅の住民をまとめることでしたが、日中勤めや学校で仮設住宅に居ない人たちや、同じ飯舘でも地区によって考え方が違っていたりしたので、様々な世代・考え方の人たちをまとめるのが難しかったように思います。

支援してくれた方々への感謝

全国をはじめ、福島市の方々には大変お世話になりました。飯野町の婦人会や自治会の方、有志の方々に様々な支援をしていただきました。今後は福島市との繋がりや、お世話になった方々への恩返し、といった事を考えていきたいと思っています。（取材日:2020/07/09）

08 米沢で3年半の避難生活 支えてくれた方々への感謝の気持ち

主婦　関向 あつ子さん

震災当日について

自宅で子ども2人と一緒にいました。急に大きな揺れが来て、どうしたらいいか分からず、「早く地震が止まってほしい。揺れが止まってほしい」と願うばかりでした。揺れが収まってからも、ドキドキというか、不安というか、恐怖がずっと続いていて、テレビをつけて情報を聞くことしかできませんでした。その後も余震が続いていたので、不安でしかたありませんでした。

母子避難について

震災後の原発事故により放射能に関しては敏感になっていました。放射能は怖いというイメージがあり、子どもを守るということと、子どもの成長への影響について心配がありました。また、原発事故後は情報が錯綜し、本当に正しい情報が分からなくなっていたことも避難する大きな要因になりました。そこで、2011年夏頃に避難先のアパートを探し始め、米沢市内のアパートで3年半、子どもと一緒に母子避難をしました。

避難先での生活

夫は福島市で仕事をしていたので、平日は私と子ども2人の生活で金曜日の夜から日曜日の夕方まで家族4人そろって米沢で過ごすという生活でした。2人とも男の子で活発に動く時期で、大変でしたが米沢市で同じく避難している母親たちとストレスや悩みを話せる場所があったので、そこを利用していました。また、地域の人から声をかけてもらったり野菜や果物をいただいいたりと、暖かい支援がありました。大変だったのは、冬に雪が多く降るので、子どもがいての雪かきや車の運転にとても苦労しました。

福島に戻るきっかけ

米沢市の支援センターに福島市の行政の方が定期的に訪れ、福島市の現在の除染の情報など知ることが出来ました。また、家の周りの除染が終わったタイミングで、夫が「今の福島だったら戻って生活しても大丈夫だよ」と言ってくれたことも、きっかけとして大きかったと思います。長男が小学校に入学するタイミングで戻るのが、私も母親として一からのスタートとして、その時期が良いと思い福島へ戻ることを決めました。

感謝の気持ち

原発事故以降は福島に居たくないという気持ちがありましたが、除染も進み今は福島の良い所をたくさん知りたいと思いますし、それをたくさんの人たちに伝えたい気持ちが大きくなっています。また、米沢市に3年半避難していましたが、周りからたくさんの支援をいただき、本当に1人では生きていけないと思いました。夫を初め、子どもたちや地域の方々、仲間などに支えられて今があると思っていますので、支えてくれた方々に感謝の気持ちでいっぱいです。（取材日:2020/07/09）

09 避難先から戻る決断は子どもの進路と好きな福島市での暮らし

ふくしま子ども支援センター　職員　三浦 恵美里さん

震災当日について

娘の幼稚園が終わって自宅に帰ってきて、近所のママ友とおやつを食べようとしたところ、大きな揺れが襲ってきました。テーブルの下に隠れようとしましたが、揺れが大きすぎて潜れないという状況でした。

母子避難について

自分たちで調べた中で自主避難者を受け入れていた県は、山形県、新潟県、秋田県でした。その中で、まず山形県に問い合わせましたが、定員になり受け入れられないとのことで、家族と話し合い秋田県の県南の方にすることに決めました。夫は仕事がありましたので福島市に残り、2011年の夏休みに私と子どもたちで避難しました。避難してからは、月に多くて2回くらいしか家族そろって会うことが出来ませんでした。

ままカフェでおしゃべりしながらのスワッグづくり

避難先での生活

避難先の秋田県横手市は、山に囲まれた盆地で福島とよく似た環境だったので、割とすぐに馴染むことが出来ました。また、子どもが通学する小学校で、私たちと同じように避難してきた家族の方や秋田県主催の交流会で、同じ境遇の方や地元の方々と交流しました。特に地元の方には子育ての面や経済的、精神的な面でも支えていただき感謝しています。

福島に戻るきっかけ

福島が好きなので必ず戻ろうという気持ちがあり、除染作業が終わるまでと家族で話し合っていました。また、上の子が5年生になるタイミングで戻りましたが、5、6年生は落ち着いて友達と仲良く過ごし、その流れで中学校へ行ってもらいたかったこともあり、戻る決断をしました。

震災での経験を活かして

秋田での避難中に、同じように避難している方への相談員をしていたのがきっかけで、福島に戻ってきた後、NPO法人ビーンズふくしまの「ふくしま子ども支援センター」で働くことになりました。県外避難をされているご家族の支援と、県内で子育てをするご家族の悩みなどを安心して話せる「ままカフェ」の開催が主な仕事です。ままカフェにくる母親たちは、お子さんの事を一番に考え、不安を抱えながら子育てや家事などを頑張っています。避難先での経験や支えられた経験を活かして、ままカフェという場で、子育てを頑張る母親たちにエールを送りたいです。また、子どもたちへも様々な職種の人達が協力し合って、少しずつ元気な福島になっていることや、皆で協力すれば何でも達成できることを伝えていきたいと思います。（取材日:2020/07/09）

10 渡利地区住民との除染作業 花見山回復への感謝の気持ち

福島市自治振興協議会連合会 顧問
渡利地区自治振興協議会　会長
花見山観光振興協議会　会長
渡利春日町会　会長

菅野 廣男さん

災害当日について

災害当日は、渡利の自宅におり大きな揺れを感じました。今までに経験したことのないような状況だと判断しました。次の日に福島第一原子力発電所が爆発して、直線距離で62kmも離れている福島市でも放射線量が高くなりました。

国を始め東京電力の放射線対策が後手に廻ったことが、科学者やマスコミの情報が錯綜させる要因となり、情報の伝達が健康被害や生活環境に対する不安を与えたと思っています。

放射線量が高かった渡利地区

福島市の渡利地区は、比較的放射線量が高い地域でした。私は自宅で生活をしておりました。そんな中で、健康被害や生活環境への影響に不安を抱く方々が多く、自主避難した方も多くおりました。私は何としても除染作業の推進を図り、以前のような「安全安心な生活環境」を取り戻したいと思いました。

除染活動についての苦労など

福島市は「ふるさと除染計画」を策定しました。それに基づき渡利地区においても除染作業は、放射線量の高い地域や小さな子どもさんの居る家庭を優先的に行い、また、各家庭から発生する除染土壌は、それぞれの家庭で保管することを確認し合い、渡利地区除染対策委員会で決定しました。これらを踏まえて除染作業を進めました。しかし、ご存知のように、放射線の高い道路側溝や路面の除染作業等は、仮置場を確保してその都度仮置場へ搬送しない限り、除染作業が実施できませんので、仮置場建設が地域に与えられた一番大きな課題でありました。

大波地区と渡利地区が市内では比較的放射線量の高い地域でありました。私は福島市自治振興協議会連合会長として、渡利地区が一番先に仮置場を建設すれば、他の地域も自治振興協議会長さんの協力を得て、市職員と共に仮置場建設が促進されると考えました。

そのことが、「安全安心な生活環境を取り戻す」ための一番重要なことと思い、渡利地区が仮置場建設の一つのモデルになれるように最大限努力しました。

住民には放射能に対する健康不安あり、自宅に除染で発生した除染土壌を置くことを嫌がる方もおりました。また、除染で発生した汚染土壌を地下に埋めて保管するか、地上に置いて保管するか悩んだ方も大勢おりました。市ではなるべく「地下に埋めて」保管するように指導しましたが、「地下に埋めて」保管すると仮置場へ搬出が遅くなる等、噂が広がり説明するのに苦労しました。

花見山の風評被害から回復への感謝

渡利地区には「桃源郷花見山」があります。その花見山に全国から多くの除染ボランティアの方にお出でいただき感謝しております。

花見山は「心を癒し明日への希望へ」一歩踏み出す勇気を与えてくれます。これが日本一の桃源郷と言われる花見山です。同時に福島の元気な姿を見てて、感じていただき、風評被害の払拭にご支援ご協力をお願いします。

震災以前は32万人だった観光客が一時期、風評被害から観光客の足が遠のきましたが、平成30年には23万4千人までに観光客が回復しました。このことは、多くの皆さんに風評被害払拭に取り組んで頂いたことによるものであり、感謝申し上げます。（取材日:2020/07/10）

11 米農家として震災10年の教訓は今も生きている

未来農業株式会社 代表取締役
農業組合法人 福島未来農業生産組合代表理事
丹野 友幸さん

震災当日について

午前中にJAの直売所に商品を搬入し、ちょうど帰宅したところでした。今まで経験したことのないような揺れを感じ、家の裏山の地中から少し大きめの岩がせりあがって転がってきました。揺れと同時に、それまで雲一つない晴天から一変、雪が吹雪いてきました。普段見られない光景を目の当たりにし、驚いたのと同時に、一瞬この世の終わりを感じました。

米作りへの不安

放射能の影響もあり自分が作った農産物の安全性について不安がありました。インターネットの情報は、正しいものから間違っているものまで色々あり、その情報を自分で見極める状況でした。それでも圃場に出続けて、この仕事続けられたのは、当時の「JA新ふくしま」の組合長が、「農家は物を作らないと、農家として生きているとは言えないから、たとえそれが売れようと売れまいと、農協は買い取ります」と言ってくれたからでした。「自分たちの作ったものが売れなかったら」という経済的な不安は、この組合長の一言で払拭されました。

その後、いろんな研究が進み正確な情報が入ってきて、米の作付けを行っても大丈夫ではないかとなってきた時に初めて、「安全な農作物を作れるのか」という不安が少しずつ解消していきました。しかし、初年度のお米は、放射能の影響で全量流通できなくなったこともあり、最初の1年くらいは不安の中で農作業を続けていくことについて、非常に葛藤していた時期だったと思います。

酒米の作付けへの取り組みについて

酒米も作っていたのですが、震災後、食用米よりも厳しい基準の酒造好適米の出荷は難しい状況でした。そのような時、浪江町で津波による被災を受けて酒蔵を全て流され、山形に移って酒蔵を再開していた鈴木酒造店とのお付き合いが始まりました。震災以降に開催されたイベントで一緒になった鈴木酒造店が福島の米農家の現状を聞き、「もし僕らが買い付けることで助けになるなら、ぜひ使いたい」と言ってくれたのです。安心して本気で酒米作りに取り組める一つの柱が出来たことは精神的にも、経済的にも非常に助けられました。

震災から10年に寄せて

震災により失われた命や、被害に遭われた方、戻ってこない部分、取り返しのつかなかった部分もたくさんありました。そのような中、福島で生活し仕事をしてきた私たちは、人との縁や、助け合う気持ちの大切さに気づくことができ、また、この10年間で築き上げることも出来たと思っています。震災の経験があったからこそ、経験のない困難な状況になったとしても、助け合ったり、譲り合ったり当時の教訓を生かしていけると思っています。

（取材日:2020/07/10）

12 入社1年目
信用金庫の仕事を通じて被災者対応にあたる

福島信用金庫　職員　宗像 夕菜さん

震災当日について

入社1年目で福島信用金庫保原支店の窓口を担当していました。まもなく窓口が閉まる時間帯に大きい揺れを感じました。地震が思ったより大きく長時間でしたので、職員やお客様も含め全員で外に避難しましたが、立っていられないほどの大きな揺れで、とても怖かったのを覚えています。

停電でスーパーなどではレジが使えなくなり、現金しか取り扱えない状況だったので、現金を払戻しに信用金庫の窓口に大勢のお客様が来店をされました。不安な様子で来店されたお客様も「現金を下ろすことが出来て良かった」と笑顔でお帰りになったことを覚えています。

震災後苦労したこと

当時は土、日曜日も休みなく窓口を開けていたので大変でしたが、信用金庫の社会的役割の大きさを実感し、新入職員の私でもお客様のお役に立てることに、やりがいを感じました。お客様に「大変な時期だけど、お互い頑張りましょう」とあたたかい言葉をかけていただいたり、地元の企業の方に食料やガソリンなどを支援していただいたりしました。また、東日本大震災の義援金を取り扱うようになってからは、毎週のように募金されるお客様がおり、その方の「命がある。仕事があるだけで私は幸せだから」という言葉がとても心に刺さり勇気付けられたのを覚えています。

また、日常生活では放射能の影響が分からない中での通勤や、断水によりお風呂に入れなかったり、トイレの水が流せなかったり、といったライフラインの遮断が精神的にも大変でした。そのような中、地元の温泉旅館が営業しており入浴できた時はとても嬉しく、忙しい中で一息つけたのを覚えています。当時は実家の家族が水や食料の調達をしてくれたので、家族の支えがあって何とか日々を乗りきることが出来たと思います。

震災を経験して子どもたちに伝えたいこと

私は一昨年に息子を出産して、命の尊さを学びました。震災を経験していない子どもたちには、震災の危険性を理解し、防災訓練に積極的に参加することにより、自分の命を守る行動が取れるようになって欲しいと思います。また、日頃から周りの人と助け合うことの大切さを伝えていきたいと思います。

未来の福島へ

時間が経つと当時感じた感謝の気持ちが薄れてしまいがちですが、日々の生活一つひとつが地元の方々に支えられていることを忘れずに過ごしていきたいと思います。また、福島の食材を進んで購入したり、地元の旅館を利用したり地域のイベントに積極的に参加したり、震災当時みんなで支え合って乗り越えた「あたたかく強い福島」を未来に残すような動きが、次の世代へもっと広まるといいなと思います。（取材日:2020/07/21）

13 津波災害に衝撃を受け 大学入学後はボランティア活動を

福島大学3年生　人文社会学群人間発達文化学類 文化探究専攻　在籍

髙橋 春奈さん

震災当日について

小学5年生で帰りの会をしている最中でした。翌日の12日が私の誕生日だったので、クラスのみんなに12歳の抱負を発表している時に、先生の携帯電話の緊急地震速報が鳴り、大きく揺れました。みんな立っていることができず、しゃがんで揺れが収まるのを待ちました。校庭に避難し、おばあちゃんに迎えに来てもらいました。

大学のボランティアサークルに入ったきっかけ

高校2年生の時に、浪江町から避難してきた友人から、浪江町で7年ぶりに花火大会が行われるので一緒に行かないかと誘われて行った時に、福島大学の災害ボランティアセンターの方がボランティア活動を行っていました。もともとボランティア活動に興味があったことと、浪江町の請戸地区という所に行ったときに住宅地だったところが津波で流され何もなくなっていました。そのとき初めて津波の被害や放射能の被害の規模の大きさを知り、自分の知識のなさを痛感し、もっと知りたいと思ったことがきっかけで、大学のボランティアサークルに入りました。

ボランティア活動について

福島大学には、災害ボランティアセンターという学生団体があり、団体加入者は400人くらいいます。私は主にマネージャーとして団体加入者の管理を行っています。福島県内での活動を中心としていますが、2019年の台風19号の時には、被災した宮城県丸森町での活動も行いました。

現在は、復興公営住宅に伺い、避難されている方への支援を行っています。お茶会をしたり、足湯を作り入ってもらったり、傾聴活動をしたり、季節の活動をしたり、最終的には孤立死をなくすことを目標に学生の立場で、話しやすい雰囲気を作りながら活動をしています。また、子どもたちの宿題を手伝ったり、一緒に運動したりという学習支援活動も行っています。

避難されている方と話をすることが楽しく、ボランティア活動というよりは遊びに行ってお話しするような感覚で活動していますが、避難されている方から「楽しかったよ」「次はいつ来るの？」などと声を掛けられたときは嬉しく、活動していて良かったと思います。

将来について

ボランティア活動を通してたくさんの方々と関わりを持つことができ、自分の知らない知識をもっと身につけたいとも思いましたし、これからも多くの人と関わりたいと思いました。福島県のために、何か自分にできることがあれば良いなと思っています。（取材日:2020/07/21）

14 震災当日生まれた栞ちゃん 夢はケーキ屋さん

福島市立福島第三小学校4年生　橋本 栞さん

震災当日について（出産の様子）

震災の前日夜中から、出産のために明治病院に入院していました。震災の時は大きな揺れで屋外に避難しましたが、寒かったので、夫の車に乗ったところ急に産気づき、病院には戻らず、そのまま車内で出産しました。午後3時26分、2，944グラムで生まれて来ました。産湯もなくガーゼに拭かれてきれいになった娘を見て「やっと生んであげられた」と思いました。

震災後の生活について

上に2人の兄弟がいますが、震災や放射線の影響により、その2人と同じような普通の子育てが出来ませんでした。店も普段通り開いておらず、育児用品も不足する中、知り合いから「あそこのお店開いていたよ」「粉ミルクや売っていたよ」「紙おむつ足りているかい」など声をかけてもらえたことは、とても助かりましたし、嬉しかったです。

外出するにも放射能を気にして出かける場所を選ばなければなりませんでしたし、特に飲み水には気を使いました。飲み水に放射能の影響があるかも知れないという話を聞いて市販のペットボトルの水を買い求めたり、ウォーターサーバーを購入したりしました。産地を確認したり放射線量を測定しているのかなどに注意して購入していました。

どうしても、外遊びを自由にさせられないので、基本的には家の中で遊ばせていましたが、体が大きくなってくるにつれ有り余る体力を発散させないとストレスもたまってくると思ったので、週末になると放射線量が低い会津方面に行って思う存分遊ばせていました。

これからの子どもたちへ

これほどの大震災は、なかなか経験することはないと思います。しかし、私たちが経験をした事を覚えている限り、これからの子どもたちへ伝え、少しでも防災の役に立てたらと思っています。そして、「土いじりは駄目だよ」「草花に触ってはいけないよ」などという制限のある生活ではなく、伸びやかに、元気に子育てができる環境になれば良いと思います。

栞さんの夢

将来はケーキ屋さんになりたいです。おいしいケーキをたくさん作りたいからです。そして、私の住んでいる福島が「みんなが笑顔でいれる福島」になっていれば良いなと思います。（取材日:2020/07/30）

15 大人の背中を見せること、それが震災後一番大事なことだと思う

国語教師・詩人
「ふたば未来学園」教育復興応援団
福島県教育復興大使
NHK復興サポーター
福島大学応援大使

和合 亮一さん

震災当日について

勤務していた高校で、入試の会議中でした。午前中で授業は終わっており、幸い校舎内に生徒の姿はありませんでした。先生方の携帯電話の緊急地震速報がさまざまに鳴り、なんだろうと皆で首をかしげた瞬間に、殴られたかのような衝撃が起きました。はじめは机の下に隠れたのですが、どうしようもなく、窓から外に避難しました。その後、まさに天変地異とはこのことなのかもしれません。みぞれが降ったのです。みぞれが降りしきる中、呆然と立ち尽くしていたことを覚えています。

言葉を発信するにあたって

詩や文章を書いたり、授業や講演をする中で、どのような言葉を伝えていくべきなのかをとても考えました。無我夢中で毎日Twitterに詩を投稿し続けましたが、傷ついた方や喪失感を抱えた方がたくさんいる状況で、福島からどのようなことを伝えていくべきなのか、大きな問題として自分にのしかかってきました。今もなお、そのことについて毎日向き合っている気がします。言葉には励ます力もあれば傷つけてしまう力もあります。発信する際には、懐の広い言葉、つまり傷ついた心や喪失感を包み込むような言葉を大切に、言葉の力を信じて伝えることが重要だと思いました。

これからの子どもたちのために出来ること

私たち福島で暮らす大人たちが、その時どのようなことを思い感じたか。その事を本気で伝えていく大人の姿を、これからの子どもたちへ見せるということが一番大事だと思っています。震災直後では出来なかったことも、きちんとした形で残すことができるようになってきました。真剣に伝える大人が周りにいることで、人生について深く考えることが出来るのは、福島でしか出来ない事であるし、福島だからこそやるべき事なのではないでしょうか。

震災から9年、10年と歳月を経て初めてそれを、余すところなく震災を経験しない子どもたちにまで伝えて行くということが、志半ばにして水平線の向こうに連れて行かれてしまった同じ福島の仲間たちの、その失われた命に応えることになるのではないかなと思います。

震災を経験して伝えたいこと

志半ばにしてこの世を去った人々に、生き残った私たちが誠実に気持ちを届けるためにも夢をあきらめず、その心の中で「生きる」ということの本当の意味について、情熱を燃やして熱く語れる人が増えてほしいと思います。震災から10年の歳月を経て改めて、私たちにとって必要なのは「夢」だと思います。

子どもたちと接して思うことは、みんな生きることに真剣であり、勉強したいという気持ちを持ち合わせており、その気持ちと同じくらい「夢」を持っています。その「夢」をためらうことなく語り合い、磨き合い、燃やし合えるような熱い血の通った福島のまちになって欲しいと思います。

（取材日:2020/07/18）

16 車いすでの避難で感じた苦労 福祉避難所の充実を

共同作業所 ぽけっと　代表
特定非営利活動法人　えいど福島　理事長

吉田 好子さん

ラジオ放送に救われた

テレビは津波や原発など、恐怖をあおるような映像ばかり放映されていましたが、ラジオ福島をつけたらホッとするような内容の放送が流れていました。確かCMも抜きで24時間、2週間以上私たちに必要な情報や励ましの言葉を放送し続けてくれていたと思います。私はその放送に救われました。今でも感謝の気持ちが大きいです。ラジオ放送に携わった人に会ったら、「その節は大変お世話になりました」とお礼を言いたいくらいです。

震災当日について

私は、「共同作業所ぽけっと」の所長と、「えいど福島」という障がい者が生活していくための「居場所」として障がい者自身が立ち上げた福祉事務所の理事長を兼任しています。共同作業所ぽけっとに居たのは職員が3人、利用者が2人の5人でした。地震が来た時、2人の利用者さんは足腰が割と大丈夫なので、机の下にすぐ隠れました。しかし、私はキャスター付きの椅子に座っており、足が不自由なため机の下には潜れず、必死に机にしがみついていたのを覚えています。

震災後の避難所について

揺れが落ち着いてから、車で自宅に向かいましたが余震が頻繁にあり家の中に入るのが怖かったので、車の中で夫の帰りを待ちました。夫が午後7時頃帰ってきたので、まず近くの学習センターへ避難しましたが、駐車場も学習センターの中も大勢の人達が避難していたため、ここでは過ごせないと判断し、次に保健福祉センターへ向かいました。しかし、ここも大勢の人が避難しており居場所がなかったため、最初に行った学習センターの駐車場に戻り一夜を過ごしました。外は吹雪いており、すごく寒かったのを覚えています。

福祉避難所について

震災などの大きな災害時には、私たちや高齢者や赤ちゃんが避難する福祉避難所を一刻も早く開設してもらいたいと思います。障がいによって必要となる自助具などが変わってきますが、私のように車いすで生活している人は、洋式トイレとベッドがないと生活できません。段ボールベッドで構わないので準備していただきたいと思います。また、呼吸器をつけている方には電源の確保も必要になります。障がい者にも配慮した福祉避難所になることを願っています。（取材日:2020/08/18）